

学生ボランティアの援助成果に関する研究 ——ボランティア活動経験の有無と活動の前後に着目して——

横山 未来 神戸学院大学心理学研究科 村井 佳比子 神戸学院大学
小久保 香江 神戸学院大学

The study on the helping effects of student volunteers

Miku Yokoyama (*The Graduate School of Psychology, Kobe Gakuin University*)
Keiko Murai (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)
Kae Kokubo (*Department of Psychology, Kobe Gakuin University*)

本研究の目的は、学生がボランティア活動経験によって得られる「援助成果」について検討することであった。研究 1 では、学生 380 名を対象に、ボランティア活動経験の有無による援助成果に対する評価の差を検討した。援助成果に関する項目の因子分析では、「肯定的感情の経験」「自己成長」「向上心の芽生え」の 3 つの因子が抽出され、これらの 3 因子において、活動経験者の得点が有意に高く、援助成果を肯定的に評価していることが示された。研究 2 では、大学生 10 名を対象に、ボランティア活動前後の援助成果の変化と活動中の悩みを検討した。援助成果の認識は活動前から高く、最も高かったのは「自己成長」で、活動後の評価も高くなることがわかった。また、活動前の不安や「被支援者への対応の難しさ」の悩みに対しての心理的支援の必要性が示唆された。

Key words: helping effects, volunteer activities, student, psychological support
キーワード：援助成果、ボランティア活動、学生、心理的支援

Kobe Gakuin University Journal of Psychology
2024, Vol.7, No.1, pp.35-45

問 題

ボランティア元年と呼ばれた 1995 年に起こった阪神淡路大震災以降、ボランティアというものに大きな関心が集まり、認知が高まったといわれている（米澤, 2010）。ボランティアとは、自分から進んで社会事業などに無償で参加する人のことである（広辞苑, 2018）。1995 年のボランティア元年から約 20 数年が経過した今日、社会的変化に伴いボランティア活動も多様化している（東京都生活文化局, 2022）。特に 2020 年に発生した新型コロナウイルス感染症によるパンデミック後、ボランティア活動が制限される一方で、インターネットを利用したボランティア活動が増加し、防災マップづくりや高齢者のスマホ講習会など、社会のニーズに応じて活動の内容が多様化

したことが報告されている（e.g., 東京都生活文化局, 2022）。また、東京都生活文化局（2022）が実施した調査によると、「直近 1 年間にボランティア活動に参加した」と回答した人の割合、「ボランティア活動に関心がある」と回答した人の割合は、共に学生が最も多かったという。このようにパンデミックを経てボランティア活動はさらに多様化し、学生を中心に広がってきているといえる。

ボランティア活動がもたらす影響については、援助を受ける者だけでなく援助者自身にも多様な影響を及ぼすことが示されている。たとえば妹尾・高木（2003）は、高齢ボランティアを対象とした調査で、日常的ボランティア活動において、援助者自身が満足感や喜びといったポジティブな成果（援助成果）を得ていることを明らかにしている。その後の研究

により、若者ボランティアにおいても同様の傾向が確認されており、たとえば福祉系専門学校生を対象とした調査では、ボランティア活動を通じて学生が幸福感や自信を得るといったような援助成果を得ていることが明らかになっている（妹尾, 2008）。また、伊藤（2006）は、子ども心理学科の大学生のうち 2 ～ 4 年生を対象に調査を実施し、ボランティア活動における対象者とのかかわりが、学生の自己成長に繋がることを報告している。同時にこの研究では、ボランティア活動の中で深く傷つく経験があったと回答する者がいることが報告されており、ボランティア活動への参加者に対するメンタルケアの必要性が示唆されている。つまり、ボランティア活動の経験は、年齢を問わず、ボランティア自身に様々な影響を及ぼすものであるといえる。

ボランティア活動を通して得られる援助成果については、年齢による質的差異があることが示されている。若者ボランティアは自分自身の成長に関する成果を得ており（妹尾, 2008）、高齢ボランティアは活動をきっかけとした人間関係の広がりに関する成果を得ているという（妹尾・高木, 2003）。これらのことから、ボランティア活動の経験が今後の人生に与える影響は、若者のボランティアの方がより大きいことが推察される。特に学生は他の世代に比べ、ボランティア活動に対する関心が高く、パンデミックによって社会的に大きな変化が生じている現在、学生ボランティアを対象に援助成果に関する調査を実施することは有意義であると考えられる。

目 的

本研究の 1 つ目の目的は、援助成果に関する調査において、ボランティア経験の差の検討の必要性が指摘されていることや（妹尾・高木, 2011）、データの蓄積が不十分なことに加えより時系列的な分析が必要であること（妹尾・高木, 2003）、心理学専攻学生（伊藤, 2006）や福祉系専門学校生（妹尾, 2008）など調査対象者の所属に偏りがあることから、広範な専攻の学生を対象に調査を実施し、学生を対象にボランティア活動の経験の有無による援助成果に対する評価やイメージの違いについて検討することである（研究 1）。仮説は、「ボランティア活動経験がある人は、活動経験のない人に比べて、ボランティア活動の援助成果を肯定的に評価している」である。ボランティア活動の経験がある人はない人と比べて、肯定的経験をした回数や否定的経験を適応的に対処し乗り越えることでボランティア活動を継続できるように工夫した経験が多いことなどが想定され、経験の有無もボランティア活動に対する評価に影響する可能性が推察される。

2 つ目の目的は、ボランティア活動前後の援助成果への評価の変化を検討することである（研究 2）。仮

説は、「ボランティア活動後に、自己成長に関連のある援助成果への評価が活動前よりも有意に高くなる」である。伊藤（2006）の、ボランティア活動での対象者との関わりを通じて自己成長につながっているという報告から、活動の前後で自己成長に関連した援助成果に変化がみられる可能性が考えられる。さらに 3 つ目の目的として、ボランティア活動中に悩んだり傷ついたりした経験があった大学生ボランティアが約 6 割いたという報告があることから（伊藤, 2006）、学生ボランティアへの心理的支援に役立てていくため、活動中の悩みの具体的な内容についても検討する。

研究 1

研究 1 は、学生を対象にボランティア活動の経験の有無による援助成果に対する評価やイメージの違いについて検討することを目的とした。仮説は、「ボランティア活動経験がある人は、活動経験のない人に比べて、ボランティア活動の援助成果を肯定的に評価している」であった。

方 法

調査対象者

九州、関西、関東地域の大学および専門学校の教員に対し web による無記名の質問紙調査への協力を求め、これに応じた大学生・大学院生・専門学校生 639 名のうち、重複回答や入力漏れ等の回答を省いた 380 名（男性 99 名、女性 275 名、回答しない 6 名、平均年齢 20.6 歳、標準偏差 1.98、有効回答率 59.5%）を調査対象者とした。調査対象者の専攻の内訳は、人文科学 55 名、社会科学 98 名、理学 12 名、工学 56 名、農学 11 名、保健 89 名、家政 7 名、教育 19 名、芸術 14 名、その他 10 名、不明 9 名であった。

調査時期

2023 年 4 月に調査を実施した。

調査内容

本調査の質問紙は、フェイスシート、過去のボランティア経験、援助成果尺度で構成されていた。

フェイスシート

調査対象者の性別、年齢、学年、所属（学部、専攻等）について回答を求めた。

過去のボランティア経験

これまでにボランティア活動に応募、あるいは企画し、参加した経験があるかどうかを尋ねた。「経験あり」と回答した者にはさらに、差し障りのない範囲で経験した時期や経験した活動の内容を自由記述するよう求めた。

援助成果尺度

ボランティア活動への評価やイメージを把握するため、妹尾・高木（2003）が作成したボランティア活動の成果を把握するための「援助成果尺度」を使用した。この尺度は「愛他的精神の高揚」「人間関係の広がり」「人生への意欲喚起」の3因子を含む、17項目から構成されている（表1参照）。17項目のうち6項目「人に対して思いやることが意識づいた」「活動を通じて自分自身が成長できた」「活動を通じて喜びや感動を経験した」「必要とされていることが実感でき自信につながった」「対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた」「活動が生活の中で重要な部分となり、自分のものとなった」は、妹尾・高木（2003）の調査後の因子分析で除外されたが、調査対象者の違いやパンデミックなどの社会的な変化による影響を鑑み、本研究ではこの6項目を含めて調査を実施した。事前に実施した予備調査でわかりにくいと回答があった「安寧」は「平穩」に、また、「活動が生活の中で」の部分は「ボランティア活動が自分の生活の中で」に修正し、これに加えて、ボランティア活動に対してのイメージを問う調査のため、文末を現在形に改変し、「ボランティア活動を通じて得られると思うものについてお尋ねします。」という教示を行った。各項目に対し、「全く得られない：1」から「非常に得られる：5」までの5件法で回答を求めた。得点が高いほどボランティア活動で

その成果を得られると考えていると判断する。

倫理的配慮

調査実施にあたっては、調査用 URL にアクセスすると、研究の目的と内容、不利益を被ることなくいつでも調査への協力を辞退できること、個人情報を守られることを明記した説明文書が提示され、同意欄にチェックを記した場合にのみ質問への回答に進むことができるようにした。

結果

因子分析

援助成果尺度 17 項目について、最尤法、プロマックス回転で探索的因子分析を行った。固有値の減衰パターンと因子の解釈可能性を考慮して3因子とし、負荷量 .35 未満の3項目を除外した14項目について再度因子分析を行った。回転後の最終的な因子パターンを表2に示す。回転後の第1因子の固有値は7.94、分散の説明率は56.7%、第2因子の固有値は0.57、分散の説明率は4.1%、第3因子の固有値は0.29、分散の説明率は2.1%であった。

第1因子は、「対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じる（.898）」、「気持ちの充足感が生まれる（.536）」、「活動を通じて喜びや感動を経験する（.394）」など、活動を通じた肯定的感

表1
援助成果尺度（妹尾・高木，2003）

第1因子「愛他的精神の高揚」

- ・人や地域に貢献しようという気持ちが芽生えた。
- ・日常生活の中で人との対応が好ましい方向に変わった。
- ・自分にできることで社会と関わり、人の役に立つことができた。
- ・対象者の幸福・安寧のための新たな目標ができた。

第2因子「人間関係の広がり」

- ・活動そのものが楽しめた。
- ・仲の良い友達ができた。
- ・新しい出会いがあり、人間関係の輪が広がった。
- ・対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になっている。

第3因子「人生への意欲喚起」

- ・「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれた。
- ・気持ちの充足感が生まれた。
- ・やりがいが生まれた。

妹尾・高木（2003）で除外された項目

- ・人に対して思いやることが意識づいた。
- ・活動を通じて自分自身が成長できた。
- ・活動を通じて喜びや感動を経験した。
- ・必要とされていることが実感でき自信につながった。
- ・対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じた。
- ・活動が生活の中で重要な部分となり、自分のものとなった。

情の経験を示す項目で負荷量が高く認められた。そのため、第Ⅰ因子は「肯定的感情の経験」と命名した。第Ⅱ因子は、「活動を通じて自分自身が成長できる (.917)」、「人に対して思いやることが意識づく (.819)」、「対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になる (.562)」など、活動を通じて自分自身の成長を示す項目で負荷量が高く認められた。そのため、第Ⅱ因子は「自己成長」と命名した。第Ⅲ因子は、「対象者の幸福・平穏のための新たな目標ができる (.681)」、「『もっと～したい』など自分自身を高める目標が生まれる (.546)」、「人や地域に貢献しようという気持ちが芽生える (.393)」など、活動を通じて向上心が芽生えることが伺える項目で負荷量が高く認められた。そのため、第Ⅲ因子は、「向上心の芽生え」と命名した。

Cronbach の α 係数は、第Ⅰ因子が .872、第Ⅱ因子が .897、第Ⅲ因子が .856 であり、十分な内的整合性を有していると判断した。また、因子間相関は、第Ⅰ因子と第Ⅱ因子が .796、第Ⅰ因子と第Ⅲ因子が .766、第Ⅱ因子と第Ⅲ因子が .693 であった。

ボランティア活動経験の有無と援助成果

ボランティア活動経験の有無によって、ボランティア活動の援助成果に対する評価やイメージに差があるのかを検討するため、調査対象者 380 名をボランティア活動「経験あり群」138 名、「経験なし群」242 名に群分けし、対応のない t 検定を実施した (表 3)。

その結果、「肯定的感情の経験」、「自己成長」、「向上心の芽生え」のいずれの下位尺度についても、経験あり群が経験なし群に比べて得点が高く、援助成果を高く評価していることが示された ($t(378) = 2.26$, $p = .023$, $d = 0.24$; $t(378) = 3.09$, $p = .002$, $d = 0.33$; $t(378) = 1.49$, $p = .137$, $d = 0.16$)。

ボランティア活動の内容

ボランティア活動について「ボランティア活動経験があると回答した方にお尋ねします。いつ頃、どのような活動に何回参加されたか、差し障りのない範囲でお答え下さい。例：大学 1 年 子どもの学習支援 2 回」と教示し、自由記述で回答を求めたところ、のべ 295 件の回答が得られた。なお、活動内

表 2
援助成果の因子分析

質問項目	平均値 (SD)	第Ⅰ因子	第Ⅱ因子	第Ⅲ因子	共通性
対象者や他のボランティアなど人と活動を共にする喜びを感じる	3.8 (0.98)	.898	-.113	.063	.739
気持ちの充足感が生まれる	3.8 (0.94)	.536	.198	.096	.609
必要とされていることが実感でき自信につながる	3.7 (0.95)	.442	.275	.092	.570
活動を通じて喜びや感動を経験する	3.8 (1.00)	.394	.359	.138	.680
活動を通じて自分自身が成長できる	4.0 (0.97)	-.123	.917	.029	.708
人に対して思いやることが意識づく	4.0 (0.90)	-.101	.819	.068	.620
対象者や他のボランティアから様々なことを教えられ勉強になる	3.8 (0.96)	.399	.562	-.176	.617
活動そのものを楽しめる	3.6 (0.94)	.212	.470	.053	.480
やりがい生まれる	3.9 (0.95)	.404	.428	.031	.661
自分にできることで社会と関わり、人の役に立つことができる	3.9 (0.94)	.359	.413	.066	.613
活動が生活の中で重要な部分となり、自分のものとなる	3.5 (1.00)	-.048	-.042	.866	.642
対象者の幸福・平穏のための新たな目標ができる	3.6 (0.99)	.007	.148	.681	.635
「もっと～したい」など自分自身を高める目標が生まれる	3.5 (0.99)	.389	-.089	.546	.659
人や地域に貢献しようという気持ちが芽生える	3.8 (0.99)	.146	.285	.393	.566

表 3
ボランティア活動経験の有無による援助成果の差

下位尺度	経験あり群 ($n = 138$)		経験なし群 ($n = 242$)		t 値	p 値	有意差
	平均	標準偏差	平均	標準偏差			
肯定的感情の経験	3.9	0.83	3.7	0.81	2.26*	.023	経験あり > 経験なし
自己成長	4.0	0.76	3.8	0.75	3.09**	.002	経験あり > 経験なし
向上心の芽生え	3.7	0.87	3.6	0.80	1.49*	.137	経験あり > 経験なし

** $p < .01$, * $p < .05$

容のみでの回答（例：海のゴミ拾い）は1回とし、回数ではなく期間として記載（例：大学1年）の回答は除外するなどして件数を算出した。これを活動内容別に検討したところ、「環境関連」「子ども関連」「医療関連」「災害関連」「福祉関連」「国際関連」「イベント運営関連」「その他」の8つに分類された（表4）。「環境関連」では、ゴミ拾いや清掃活動、農業支援などの活動が、「子ども関連」では、保育園、こども園、放課後デイサービス、子ども食堂等でのふれあいや学習支援などの活動が、また、「医療関連」では、献血、オリンピックやマラソンやラグビーでの救護、山岳医療支援などの活動が見受けられた。「災害関連」では、復興支援、「福祉関連」では、高齢者施設訪問や介護ケアなど、「国際関連」では、留学生サポートや外国人の日本文化体験、日本語授業などの活動が行われており、さらに、「イベント関連」では、地域の祭りやマラソン大会、オープンキャンパスなどのイベント運営などの活動があった。「その他」の活動としては、募金活動や地域活動があり、活動が多岐にわたっていることが示された。

表4

ボランティア活動の内容

分類	件数
環境関連	107
子ども関連	53
医療関連	14
災害関連	7
福祉関連	17
国際関連	11
イベント運営関連	66
その他	20

考 察

本調査で得られた援助成果に関する項目について因子分析を行ったところ、「肯定的感情の経験」「自己成長」「向上心の芽生え」の3つの因子が抽出された。抽出された3因子において、ボランティア活動経験の有無による平均値の差を検討したところ、全ての因子において経験がある者の得点が有意に高く、ボランティア活動の成果に対して肯定的なイメージを強く持っていることが示された。よって、仮説「ボランティア活動経験がある人は、活動経験のない人に比べて、ボランティア活動の援助成果を肯定的に評価している」は支持された。

このことは、若者ボランティアはボランティア活動の経験を通じて援助成果を得ているという、妹尾（2008）の調査結果と一致している。つまり、ボランティア活動の内容が多様化している現在においても、学生ボランティアは、ボランティア活動を経験する

ことによって援助成果を得ることができているといえる。ただし、本研究で実施した因子分析により得られた援助成果の因子構造は、妹尾・高木（2003）のものと異なる結果となった。これは、本研究では予備調査でわかりにくいと回答があった質問項目の語句にやや修正を加え、ボランティア活動に対してのイメージを問う調査のため文末を現在形に改変し使用したなど、妹尾・高木（2003）の援助成果尺度と本研究で使用した尺度がやや異なっている部分があることが影響している可能性が考えられる。また、妹尾（2008）において、若者がボランティア活動を経験することで得ていた援助成果の特徴は、自分自身の成長に関する成果であることが明らかになっている。今回の調査で、3因子の中で経験の有無による有意差が最も大きかったのは「自己成長」であり、広範な学部・専攻の学生を対象とした今回の調査でもそれは同様であった。これらのことより、活動内容や所属（学部や専攻等）が多様になったとしても、学生ボランティアはボランティア活動に参加する前の期待以上に、実際に活動に参加することによって得られる成果、特に「自己成長」という成果が大きい可能性がある。

先行研究では、ボランティア活動の経験がある者のみを分析対象としたものが多かったが、本研究においてはボランティア活動経験のない者も対象とすることで、経験の有無による差を検討することができた。経験の有無による比較を行った研究として伊藤（2006）があるが、経験がある者の方が、ボランティアに対する関心度と参加意識が高いことが示されていた。今回の調査の結果では、ボランティア活動経験者の方が援助成果に対する評価やイメージも高いことが新たに明らかになった。しかし、ボランティア活動経験の有無によって援助成果に対する評価に差があることは示されたが、実際にボランティア活動に参加することで援助成果に変化があるかどうかの検討には至っていない。ボランティア活動経験者がもともと成果を高く評定している可能性もあり、活動を実際に経験することによって援助成果に変化が生まれるのかは明らかになっていない。そのため、実際のボランティア活動の前後で、援助成果に対する評価の変化をみる必要がある。

研究2

研究2は、ボランティア活動前後の援助成果への評価の変化を検討することを目的とした。仮説は、「ボランティア活動後に、自己成長に関連のある援助成果への評価が活動前よりも有意に高くなる」であった。加えて、ボランティア活動中の悩みなどより個別具体的な検討を行うことを目指す。

方 法

調査対象者

兵庫県の私立大学に在籍し、大学のボランティア活動支援室が募集するボランティアプログラムに参加した学生のうち、調査への協力に同意し回答を行った者を対象とした。ボランティア活動開始前は 32 名（男性 16 名、女性 15 名、回答しない 1 名、平均年齢 19.3 歳、標準偏差 0.78）、ボランティア活動終了後も引き続き回答を得られたのは 17 名であった。活動前の回答と活動後の回答が ID による照合が可能であったのは、10 名（男性 3 名、女性 6 名、回答しない 1 名、平均年齢 19.1 歳、標準偏差 0.74）であったため、この 10 名を分析対象とした。調査対象者の専攻の内訳は、人文科学 3 名、社会科学 5 名、保健 2 名、であった。

調査時期

2023 年 2 月に調査を実施した。

調査方法および倫理的配慮

ボランティア活動開始前に実施される事前研修会と、活動終了後の事後研修会にて調査を実施した。調査に当たっては、調査内容の説明文と調査用ページにアクセスできる QR コードが印刷された資料を提示、調査内容の一部にボランティア活動に対する不安や悩みについてたずねる項目があること、調査への協力は調査対象者の自由な意志で決められること、調査に同意をした後でも同意の撤回・回答の中断ができること、調査に協力しなくても不利益を被ることは一切ないことを文書と口頭で説明した後、同意書にサインを得てから調査ページにアクセスし、活動前・活動後の調査結果を対応させるための任意の番号を記入した上で、質問への回答を求めた。一部活動の前後での変化を見る項目があるため、活動終了後の調査は活動開始前の調査に協力済みであることを原則とする旨も含め協力を求めた。ただし、調査協力の任意性に配慮するため、QR コードの配布は活動開始前の調査への回答の有無に関わらず全員に行った。所要時間は、活動開始前は約 10 分、活動終了後は約 15 分であった。なお、本研究は神戸学院大学心理学部人を対象とする研究等倫理審査委員会の審査を受け、神戸学院大学学長の承認を得ている（承認番号 HP22-16）。

調査内容

本調査の質問紙は、ボランティア活動開始前の事前研修会で配布したものとボランティア活動終了後の事後研修会で配布したものの 2 種類であった。ボランティア活動開始前の質問紙は、フェイスシート、過去のボランティア経験、今回参加するボランティアの内容、今回のボランティア活動への期待と不安の程度、援助成果尺度で構成されていた。ボランティ

ア活動終了後の質問紙は、フェイスシート、今回のボランティア活動へ関わった期間、援助成果尺度、活動への満足度、ボランティア活動での悩み尺度、活動再参加意欲で構成されていた。

ボランティア活動開始前

1. フェイスシート

調査対象者の性別、年齢、学年、学部、過去のボランティア経験、今回参加するボランティアの内容について回答を求めた。また、ボランティア活動前後のデータを照合するため、任意の ID（アルファベットと数字を組み合わせた 7 桁の番号）の記載を求め、覚えておくように教示した。

2. 今回のボランティア活動への期待と不安の程度

参加する活動が複数ある人には、そのうちで最も力を入れたいと思う活動を 1 つ選んでもらい回答することを求めた。選んだ活動について「どの程度期待していますか」「どの程度不安がありますか」とたずね、それぞれ「全く期待していない：1」もしくは「全く不安はない：1」から「非常に期待している：5」もしくは「非常に不安がある：5」の 5 件法で現在の気持ちを評定させた。得点が高いほど、それぞれ期待もしくは不安の程度が大きいと判断する。

3. 援助成果尺度

妹尾・高木（2003）が作成した援助成果尺度をもとに、本研究 1 で作成した尺度を用いた。「肯定的感情の経験」4 項目、「自己成長」6 項目、「向上心の芽生え」4 項目の 3 つの下位尺度と因子分析で除外された 3 項目から構成されている。「全く得られない：1」から「非常に得られる：5」までの 5 件法で回答を求めた。得点が高いほど今回のボランティア活動でその援助成果を得られると期待していると判断する。

ボランティア活動終了後

1. フェイスシート

ボランティア活動開始前の質問紙に記載した ID を活動終了後の質問紙にも再度記載するよう求めた。

2. 今回のボランティア活動へ関わった期間

ボランティア活動開始前の質問紙に記載した、最も力を入れたいと思う活動に関わった期間について、「1 日」「2 日」「3 日」「4 日以上」「活動日以前から」「その他」から選択するよう求めた。

3. 援助成果尺度

ボランティア活動開始前と同様の援助成果尺度の文末を過去形に改変したものを用いて、自己のボランティア活動から成果がどの程度得られたと思うかを測定した。回答は、「全く得られなかった：1」から「非常に得られた：5」の 5 件法で求めた。得点が高いほど援助成果が得られたと自己評価していると判断する。

4. 活動への満足度

今回の活動に対する満足度を、「全く満足できなかった：1」から「非常に満足できた：5」までの 5

件法で回答を求めた。

5. ボランティア活動での悩み尺度

伊藤（2006）の調査結果で得られた悩みの具体的内容をもとに作成した10項目からなる尺度である（表5参照）。その悩みに該当する程度を「全くあてはまらない：1」から「非常にあてはまる：5」までの5件法で評定を求めた。項目の抽出にあたっては、ボランティアの対象が限定されている項目を除外し、重複する項目を1つにまとめた。得点が高いほど、悩みを強く抱いていると判断する。また、悩みの内容について、差し障りのない範囲で具体的に記載するように求めた。

6. 活動再参加意欲

今回参加した活動と同じ活動に参加できる機会がある場合、再度参加したいかどうかを「全く参加したくない：1」から「ぜひ参加したい：5」の5件法で回答を求めた。

結 果

ボランティア活動経験の有無と援助成果尺度得点

ボランティア活動の経験と活動前後の援助成果の評定値を表6に示す。分析対象者10名のうち、8名が経験あり、2名が経験なしであった。この10名の活動前後の援助成果の変化の有無を検討するため、1名ずつ活動前と活動後のそれぞれで、本研究1で抽出された因子ごとの援助成果得点の平均値と標準偏差を算出した。その結果、活動の前後で援助成果に大きな変化が認められた者はいなかった。

表5

ボランティア活動での悩み

- ・対応が難しくて悩んだ
- ・活動に必要な知識がなく、積極的に関われなかった
- ・どう動いたら良いかわからなかった
- ・相手を傷つけてしまったのではないかと不安を感じた
- ・嫌な言葉に傷ついた
- ・ボランティア同士の協力ができなかった
- ・相談できる人がいなかった
- ・必要とされていると感じた
- ・忙しく、ボランティア活動への参加が制限された
- ・想像とのギャップがあった

表6

ボランティア活動経験の有無と活動前後の援助成果尺度の得点の変化

ID	ボランティア 活動経験	肯定的感情の経験		自己成長		向上心の芽生え	
		活動前（SD）	活動後（SD）	活動前（SD）	活動後（SD）	活動前（SD）	活動後（SD）
1	あり	4.8 (0.50)	4.5 (0.58)	5.0 (0.00)	4.7 (0.49)	4.3 (0.50)	4.3 (0.50)
2	なし	4.0 (0.00)	4.8 (0.50)	4.2 (0.41)	5.0 (0.00)	3.8 (0.50)	4.3 (0.50)
3	あり	4.0 (0.00)	3.3 (0.50)	3.8 (0.41)	3.3 (0.49)	3.3 (0.50)	3.3 (0.50)
4	あり	4.8 (0.50)	4.8 (0.50)	4.8 (0.41)	4.8 (0.38)	3.8 (0.50)	3.8 (0.50)
5	あり	4.0 (0.00)	3.0 (0.00)	4.8 (0.41)	3.5 (0.53)	4.3 (0.50)	3.0 (0.00)
6	なし	5.0 (0.00)	5.0 (0.00)	4.8 (0.41)	5.0 (0.00)	4.3 (0.50)	3.5 (0.58)
7	あり	4.0 (0.00)	4.8 (0.50)	4.2 (0.41)	4.5 (0.53)	4.0 (0.00)	3.8 (0.50)
8	あり	3.3 (0.50)	3.3 (0.50)	3.3 (0.52)	3.2 (0.38)	2.3 (0.50)	3.3 (0.50)
9	あり	5.0 (0.00)	4.8 (0.50)	4.8 (0.41)	5.0 (0.00)	4.8 (0.50)	3.5 (1.29)
10	あり	4.5 (1.00)	4.8 (0.50)	5.0 (0.00)	5.0 (0.00)	4.8 (0.50)	5.0 (0.00)

ボランティア活動前後の援助成果

ボランティア活動を行う前に抱いている、ボランティア活動を通じて得られると期待している援助成果と、実際にボランティア活動を行った後に得られたと自己評価した援助成果との間に差があるのかを検討するため、対応のある t 検定を行った（表 7）。活動前後でのデータが照合可能であった 10 名のデータをもとに分析したところ、有意な差は認められなかった（ $t(9) = 0.28, n.s.$; $t(9) = 0.46, n.s.$; $t(9) = 0.76, n.s.$ ）。

ボランティア活動の内容

過去のボランティア活動経験について「ボランティア活動の『経験あり』と回答した方にお尋ねします。いつ頃どのような活動に何回参加されたか、差し障りのない範囲でお答え下さい。例：大学 1 年 子どもの学習支援 2 回」と教示し、自由記述で回答を求めたところ、のべ 39 件の回答が得られた。なお、本研究 1 と同様に、活動内容のみでの回答は 1 回とし、回数ではなく期間として記載の回答は除外するなどして件数を算出した。これを活動内容別に検討したところ、「環境関連」「子ども関連」「医療関連」「災害関連」「福祉関連」「イベント運営関連」の 6 つに分類された。「環境関連」では、農業体験などの活動が、「子ども関連」では、地域の子どものたちとの工作などの活動が、また、「医療関連」では、AED 救命ボランティアなどの活動が見受けられた。「災害関連」では、被災地支援関係や防災教育、「福祉関連」では、介護体験や高齢者ふれあい体験などの活動が行われ

ており、「イベント運営関連」では、マラソン大会のゼッケン渡しなどの活動があった。さらに、今回参加するボランティア活動の内容について「今回参加するボランティア活動をお書きください。複数参加される場合は、最も力を入れたいと思う活動を 1 つ選んでお書き下さい。」と教示し、自由記述で回答を求めたところ、10 件の回答が得られた。これを活動内容別に検討したところ、「環境関連」「子ども関連」「災害関連」「国際関連」の 4 つに分類された。「環境関連」では、大学のキャンパス周辺の清掃などの活動が、「子ども関連」では、地域の児童館での子どもたちとのふれあい活動などが見受けられた。「災害関連」では、防災訓練、「国際関連」では、定住外国人支援や留学生への食糧配布の手伝いと交流などの活動があった。

活動に対する期待と不安、満足度、再参加意欲

今回参加するボランティア活動に対して、「どの程度期待していますか」、「どの程度不安がありますか」という、活動前の期待度と不安度それぞれについて、平均値と標準偏差を算出した。その結果、いずれも 5 を最大値として、期待度の平均値は 4.5（標準偏差 0.71）、不安度の平均値は 2.5（標準偏差 0.97）であった。活動後の満足度の平均値は 4.4（標準偏差 0.84）であった。

また、今回参加した活動と同じ活動に参加できる機会がある場合、再度参加したいとどの程度感じたのかを明らかにするため再参加意欲については、平均値 4.3（標準偏差 0.82）であった。

表 7
ボランティア活動前後の援助成果の差

	活動前		活動後		t 値	有意差
	平均	SD	平均	SD		
肯定的感情の経験	4.3	0.57	4.3	0.78	0.28	<i>n.s.</i>
自己成長	4.5	0.57	4.4	0.76	0.46	<i>n.s.</i>
向上心の芽生え	3.9	0.75	3.8	0.60	0.76	<i>n.s.</i>

表 8
ボランティア活動前の期待・不安と活動後の満足度・再参加意欲（個別）

ID	ボランティア活動経験	期待度	不安度	満足度	再参加意欲	悩みに関する自由記述
1	あり	5	2	5	3	自分の心を開けなかった。
2	なし	4	2	4	4	一人ひとりへの対応力
3	あり	4	3	3	3	世代に合わせた対応が難しかった
4	あり	5	1	5	5	未記入
5	あり	5	3	3	4	未記入
6	なし	4	1	5	5	未記入
7	あり	5	3	5	5	未記入
8	あり	3	3	4	4	未記入
9	あり	5	4	5	5	子どもに〇〇して遊びたいと言われ、また時間があつたらやろうね、と言っていたのに時間が出来た時他の子に遊びに誘われて約束を破ってしまった。本人は気にしていない様子だったが、帰るまで自分が気にしてしまった。
10	あり	5	3	5	5	悩みは感じられなかった

個別にみると、期待度・満足度・再参加意欲は5と評価が高く不安度は1というボランティア活動を肯定的に捉えている人（ID4）もいれば、期待度・満足度・再参加意欲は5と高いが不安度も4と高い肯定的感情と不安感の両方を抱いていた人（ID9）もあり、個人差があった（表8参照）。期待度・満足度・再参加意欲に対する回答は、すべて3～5であった一方で、不安度に対する回答は1～4となっており、他の3つの項目に比べると個人差がやや大きかった。

ボランティア活動中の悩み

ボランティア活動の悩みの内容を調べるため、10項目からなるボランティア活動中の悩み尺度について、各項目の平均値を算出した（最大値5）。その結果を、表9に示す。なお、「必要とされていると感じた」は、逆転項目であるため逆転処理した後のデータで平均値を算出した。「対応が難しくて悩んだ」（3.6）を除き、概ね1.0～2.0程度という結果であった。

また、悩みの内容をより具体的に理解するため、悩みに関する自由記述を確認したところ、「世代に合わせた対応が難しかった」、「一人ひとりへの対応力」、「子どもに〇〇して遊びたいと言われ、また時間があつたらやろうね、と言っていたのに時間が出来た時他の子に遊びに誘われて約束を破ってしまった。本人は気にしていない様子だったが、帰るまで自分が気にしてしまった。」、「自分の心を開けなかった」という回答があった（表8参照）。

考 察

本研究の目的は、ボランティア活動の前後の援助成果の変化の有無やボランティア活動中の悩みなど、より個別具体的な検討を行うことであった。仮説は、「ボランティア活動後に、自己成長に関連のある援助成果への評価が活動前よりも有意に高くなる」であった。ボランティア活動に参加した学生のうち10名を対象に分析を実施したところ、ボランティア活動の

前と後で援助成果に対する評価に有意な差は認められなかった。よって、仮説は支持されなかった。一方で、ボランティア活動実施時に感じた悩みでは、「被支援者への対応の難しさ」が挙げられていた。以下、それぞれについて考察する。

ボランティア活動前後の援助成果の変化について

ボランティア活動前後の援助成果の変化について分析を行ったところ、自己成長を含む全ての因子で、活動の前後で援助成果に有意な差は認められなかった。

ボランティア活動前の援助成果の評価値を見ると、「肯定的感情の経験」は平均得点4.3、「自己成長」は平均得点4.5、「向上心の芽生え」は平均得点3.9であり、いずれも高得点であることが示されている。また、今回の調査で分析対象とした10名中8名に、ボランティア活動の経験があった。このことから、研究1の調査結果で示された「ボランティア活動の経験者は、もともと援助成果に対する評価が高い」という可能性を裏付ける結果であると考えられる。高木・玉木（1996）においても、活動の前後でボランティア活動の有意義性認識が変わらない人が多く、特にその傾向は以前からボランティア団体に所属していた人々で顕著であったという結果が得られており、活動に参加する前から有していたボランティアの有意義性に対する高い認識を、参加することで確かなものにしたのではないかと述べている。今回の調査で明らかになったのは、活動の有意義性の認識ではなく援助成果の認識だが、今回の活動以前にボランティア活動の経験がある回答者が多く、活動の前からすでにボランティア活動で得られる援助成果を認識していた可能性が考えられる。また、荒井・野嶋（2017）は、自己成長は内発的な参加志向動機を高めることを示している。このことから、活動前から自己成長という援助成果を得られると考えていたため、内発的な動機づけが活動後まで保たれ、援助成果に大きな変化がなかった可能性がある。

表9
ボランティア活動での悩み

質問項目	平均値	SD
対応が難しくて悩んだ	3.6	1.08
必要とされていると感じた●	2.3	0.82
忙しく、ボランティア活動への参加が制限された	2.1	1.37
相手を傷つけてしまったのではないかと不安を感じた	2.0	1.05
活動に必要な知識がなく、積極的に関われなかった	1.9	0.99
想像とのギャップがあった	1.9	0.99
どう動いたら良いかわからなかった	1.8	1.32
相談できる人がいなかった	1.3	0.68
嫌な言葉に傷ついた	1.1	0.32
ボランティア同士の協力ができなかった	1.1	0.32

●平均値逆転処理済み

今回の調査において活動の前と後ともに回答があり分析対象にできた 10 名は、自身が活動前に抱いていた期待通りに援助成果を得ることができ今回の活動の経験を肯定的に捉えているため、活動後の調査協力が積極的であった可能性がある。反対に 10 名以外の人々は、活動前に抱いていた自身の期待通りの成果を得られなかったため、活動後にボランティア活動での成果を問う調査への協力が抵抗感があったのかもしれない。

ボランティア活動に対する期待と不安・満足度・再参加意欲、および、ボランティア活動中の悩みについて

本研究の調査対象者 10 名は、概ねボランティア活動への意欲が高く、参加前の不安度の得点が期待度の得点を上回る人はいなかった。また、参加後の満足度および再参加意欲の得点も 2.0 以下のネガティブな評価をした人はおらず、自ら積極的に学ぶ姿勢がうかがえた。ボランティア活動中に感じた悩みとしては、ボランティア活動での悩み尺度の「対応が難しくて悩んだ」以外項目の平均値が概ね 1.0 ～ 2.0 と悩みの程度が低かったのに対し、「対応が難しくて悩んだ」は 3.6 と、他の項目に比べ悩みの程度が高かった。悩みの具体的内容を尋ねた自由記述をみると、「一人ひとりへの対応力」、「世代に合わせた対応が難しかった」などの回答があり、被支援者とのかわりに関する悩みがあることがうかがえた。自由記述の回答があった者をみると、ボランティア活動経験者 3 名、経験なし 1 名であった。たとえば、ボランティア活動経験があり、期待度・満足度・再参加意欲が高く、不安度も高い、肯定的感情と不安感の両方を抱いていた人 (ID9) は、「子どもに〇〇して遊びたいと言われ、また時間があったらやろうね、と言っていたのに時間が出来た時他の子に遊びに誘われて約束を破ってしまった。本人は気にしていない様子だったが、帰るまで自分が気にしてしまった。」という、子どもとの関わりに意欲的に取り組む中での具体的な悩みを抱いていた。その他の人の「自分の心を開けなかった」、「一人ひとりへの対応力」、「世代に合わせた対応が難しかった」という回答からも被支援者へ積極的に関わろうとする中で悩んだことがうかがえた。学生はボランティア活動において積極的な関わりができるようになるほど自己成長が促されていくが、同時に経験の深まりにともない「抱え込み」による悩みが増大する傾向が確認されており (伊藤, 2006)、本研究においても同様の傾向が確認されたと考えられる。このような成長に伴う悩みに対しては、何らかの心理的なサポートが必要ではないかと思われる。

総合考察

本研究の結果、学生ボランティアはボランティア活動を経験することによって、援助成果を得ることができており、特にボランティア活動の経験者は、活動に参加する前から援助成果に対する認識が高い可能性が示された。援助成果の中でボランティア活動経験の有無と活動の前後いずれにおいても、最も高く評定されていたのは「自己成長」であった。このことは、自分自身の成長に関する成果を得ているという妹尾 (2008) の若者ボランティアの特徴と一致していた。これらのことから、ボランティア活動が、社会に出ていく前に学生が自分自身の成長を実感できる機会のひとつとなり得る可能性が考えられた。

一方で、ボランティア活動前の不安や「被支援者への対応の難しさ」の悩みを抱えている学生ボランティアがいることも明らかになった。伊藤 (2006) における、ボランティア活動で対象者との関わりを通じて、自分のあり方に悩み内省し、さらに自己成長にまでつなげている様子が伺えたという結果を支持するものであり、悩み考えることによって自己成長が促進される面もあると考えられる。このことから、不安を低減できるような支援やボランティア活動に参加した中で感じた対応の困難さを共有して考えることができる場を提供する支援などの必要性が考えられた。本研究によって得られた結果が、今後の学生ボランティアへの支援に活用され、ボランティア活動を通じた援助成果を学生ボランティアがより得られることが期待される。

最後に、本研究における発展可能性と課題について述べる。妹尾・高木 (2003) で必要性が言及されていた時系列的分析を、本研究ではボランティア活動を行う前と行った後という形で実施した。ボランティア活動に実際に参加した者を対象としたデータが得られたことは、意義があるといえる。しかしながら、本研究で使用した援助成果尺度 (妹尾・高木, 2003) は妹尾 (2008) などの若者ボランティアを対象とした後続研究でも用いられていることから本研究においても使用したが、妥当性の検討が十分ではなく、本研究 2 で得られたデータ数も少ないため、ボランティア活動の前後の変化によりせまるためには、今後、データを蓄積し妥当性を検証していく必要がある。加えて、ボランティア活動内容の回答方法についても、活動の種類や回数を選択式にするなどして除外する回答を減らす工夫をしていく必要性もあると考えている。また、自発的な活動参加に限らないような必修のボランティアプログラムなどにおいてもボランティア活動経験による援助成果がどの程度得られるのかについても検討の余地がある。

利益相反

本論文に関して開示すべき利益相反関連事項はない。

謝 辞

研究2の調査実施にあたり、お力添えいただきました神戸学院大学ボランティア活動支援室の皆様にご心から感謝申し上げます。

引用文献

荒井 俊行・野嶋 栄一郎 (2017). 大学生のボランティア活動への参加成果志向が参加志向動機・不参加志向動機に及ぼす影響 日本教育工学会論文誌, 41, 97-108. <https://doi.org/10.15077/jjet.40102>
伊藤 嘉奈子 (2006). 鎌倉女子大学における心理学専攻学生によるボランティア活動のもつ意味—実態と今後の支援について— 鎌倉女子大学紀要, 13, 15-26. <https://doi.org/10.18990/00000052>
新村 出 (編) (2018). 広辞苑 岩波書店
妹尾 香織・高木 修 (2003). 援助行動経験が援助者自

身に与える効果：地域で活動するボランティアに見られる援助成果 社会心理学研究, 18, 106-118. <https://doi.org/10.14966/jssp.KJ00003722530>
妹尾 香織 (2008). 若者におけるボランティア活動とその経験効果 花園大学社会福祉学部研究紀要, 16, 35-42.
妹尾 香織・高木 修 (2011). 援助・被援助行動の好循環を規定する要因：援助成果志向性が果たす機能の検討 関西大学社会学部紀要, 42, 117-130.
高木 修・玉木 和歌子 (1996). 阪神・淡路大震災におけるボランティア——災害ボランティアの活動とその経験の影響—— 関西大学社会学部紀要, 28, 1-62.
東京都生活文化局 (2022). 都民等のボランティア活動等に関する実態調査 東京都生活文化局 Retrieved September 5, 2022 from https://www.seikatubunka.metro.tokyo.lg.jp/chiiki_tabunka/chiiki_katsudo/kyoujo/files/0000000849/r03_volunteer_report.pdf
米澤 美保子 (2010). ボランティア活動の継続要因 関西福祉科学大学紀要, 14, 31-41.

—2024.8.29 受稿 2024.11.13 受理—